

沖縄県の小学校における「総合的な学習の時間」の実態の検討

宮 城 利佳子*

Survey on integrated studies at elementary school in Okinawa

MIYAGI Rikako

要 旨

沖縄県内の小学校を卒業した学生に対し、小学校の「総合的な学習の時間」について質問紙調査を行った。その結果、学習した内容の中で最も記憶に残っていることは、沖縄県に関連する内容、特に戦争についてであり、「総合的な学習の時間」に学習したい内容は、沖縄についてであることが明らかになった。

要 約

小学校における総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方による課題解決学習が行われており、実社会や実生活の中から問いを見出し、課題を立て、情報を集め、情報を分析し表現することが目標となっており、主体的・協同的な学びが重視され、積極的な社会参加のための学習が行われている。

沖縄県は、亜熱帯に位置し、日本本土とは異なる歴史や文化をもっている。沖縄県の総合学習においては、地域の特色に応じた課題として、沖縄県の伝統と文化に関することが、実社会や実生活に関連する問いとなることが考えられる。

そこで本研究では、沖縄県で小学校教育を受けた高校卒業後の学生が、小学校で行った総合学習をどのように記憶しているかを調査することで、どのようなテーマが記憶に残る総合学習となるのか。総合学習として、さらに深めるテーマにどのようなものがあるのかについて検討を行った。調査の結果、(1)総合的な学習において最も記憶に残っている学習内容として、戦争について学んだ経験を挙げる者が多いこと、(2)学生は、沖縄について学びたいと考えていることが明らかになった。一方、探究的な活動を意識している学生が少なかった。今後、授業実践に置ける工夫が必要だと考えられる。

キーワード：総合的な学習の時間、沖縄県、小学校、カリキュラム・マネジメント、沖縄戦

* 琉球大学教育学部

1. 問題と目的

1. 1 新学習指導要領における総合的な学習

1. 1. 1 カリキュラム・マネジメントと総合的な学習

平成29年（2017年）3月に、文部科学省によって新しい小学校新学習指導要領が告示された。新しい小学校学習指導要領では、カリキュラム・マネジメントという概念が導入されることになった。カリキュラム・マネジメントについて、学習指導要領には、以下のように記述されている。

各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。（文部科学省 2018）

（波線部は筆者による。）

カリキュラム・マネジメントとは、「学校の教育目標を具現化するために、評価から始まるカリキュラムのマネジメントサイクルに、組織文化を含めた学校内外の諸条件のマネジメントを対応させ、これを組織的に動態化させる課題解決的な営み（田村 2005）」である。つまり、これまで、教科書を中心とした学習であったのが、「児童や学校、地域の実態を適切に把握」する評価を起点として、実態にあった学習が行われるようにと変化したのである。

2007年に全国学力・学習状況調査が開始され、義務教育においては、B問題で活用型の学力へと教育は変化してきた。そして、今後、大学入試改革が行われ、高等学校段階でも教育は変化していくことが予測される（原田 2018）。

このような中でカリキュラム・マネジメントを導入することは、総合的な学習の時間の理念が、学習指導要領全体へと広がったものであると捉えることもできる。児童や学校、地域の実態に合わせ、教育課程を編成、実施、評価・改善するというカリキュラム・マネジメントの一連のサイクルを運用するにあたって、教育内容を相互的に関連づけて教科横断的な取り組みを行うという点において、教育内容の構成が教科書に沿って行われるのではなく、子どもの実態にあわせて行われる生活科及び総合的な学習の時間と同様の考え方であるからである（鈴木 2017）。

今後、総合的な学習の時間をより充実させるためには、評価やそれに基づく改善のPDCAサイクルを行い、地域資源を活用するカリキュラム・マネジメントをしていく必要がある。

1. 1. 2 総合的な学習と探求課題

平成29年（2017年）の改訂で、総合的な学習の時間の目標には変化が見られた。以下にそ

の内容を示す。

平成29年告示	平成20年告示
<p>第1目標</p> <p>探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。</p> <p>(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解できるようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>	<p>第1目標</p> <p>横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。</p>

* 文部科学省（2018）、文部科学省（2009）を引用した。

平成20年告示に比べ、平成29年の改訂では、総合的な学習の時間を通して、身につける資質・能力が明示され、探究的な学習の過程を一層充実することが強調されている。これまでと同様に、主体的な学び、協同的な学びを重視しているが、記述がより具体的になり、これまでよりさらに総合的な学習の時間が重視されていることがわかる。

探究課題については、以下のように定められている。

目標を実現するにふさわしい探究課題については、学校の実態に応じて、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題、児童の興味・関心に基づく課題などを踏まえて設定すること。

つまり、総合的な時間に扱う内容は、各学校が実態にあわせて決めることができる。その際に、地域や学校の特色に応じた課題を扱うことも可能であり、総合的な学習の時間には地域性のある学びが展開されていると考えられる。

実際に、数多くの地域の実態にあわせた学びが報告されている（谷尻・早崎 2019、花島 2019等多数）。そして、探究のプロセスを重視した展開を重視する実践が重要であることについて繰り返し指摘されてきている。

このように何を学ぶのかという学習内容を重視するのではなく、合科的に、探究のプロセスを重視し、主体的・協同的に学びを進めていくことは、保育における「遊び」や小学校低学年での生活科における「学び」からつながるものであり、技術が飛躍的に進歩し先行きが見えない時代において重要なものとなってくると考えられる。

1. 1. 3 探求学習と保育

保育において、探求型の保育実践は多く実施されている。砂上（2019）は、『保育学用語辞典』の「遊びを通しての総合的指導」の項目で、「発達の諸側面にかかわる内容を、遊びを中心とする具体的な活動を通して指導する点に、幼児教育の大きな特徴がある。」とし、「ねらいと内容は領域ごとに取り出して扱うのではなく、具体的な活動のなかで総合的に始動される。」とし、「テーマやめあてを共有して子どもが協力して取り組む『プロジェクト保育』も、具体的な活動を通して総合的指導をするという点において、遊びを通しての指導の発展、延長にあるものといえる。」としている。つまり、保育では、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五領域は、領域ごとに分けて行われるのではなく、総合的に行われており、その中で「プロジェクト保育」という形をとることもあるということである。保育における「遊びを通しての総合的指導」は、教科別に分けて行うのではなく、児童の興味・関心に基づいて設定した課題に取り組むという点において小学校以降の生活科や総合的な学習につながっていくものであると考えられる。

遊びにおける「探求」について、平成29年告示の保育所保育指針及び幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領ではどのように扱われているのかについて野口（2020）が整理を行っている。野口（2020）によると、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自然との関わり・生命尊重」、そして領域「環境」の中で、「探求心」という用語が使用され、子どもが深める（深まる）側面として、①関係性、②活動や体験、③環境との関わり、④思考や学び、⑤生活の5つのカテゴリーがあげられている。

小学校以降での総合的な学習の時間においても、子どもが深める側面をどのようなものにするのかに、学習の課題となる内容について検討を行う必要がある。

1. 2 沖縄県と総合的な学習の時間

1. 2. 1 沖縄県における総合的な学習の時間

沖縄県は亜熱帯に位置し、日本本土とは異なる気候の特徴を持っている。冬も温暖であり、雪が降ることはほぼない。また、日本本土とは異なる歴史や文化を持っている。年中行事も、日本本土とは異なっている。しかし、沖縄県の歴史については、小中高の歴史に時間で取り

上げられる割合はきわめて小さく、子どもにとって学べる場が少ないと考えられる。また、沖縄県の言語は、ユネスコで消滅の危機にあるとされている（重大な危機：八重山語、与那国語、危険：国頭語、沖縄語、宮古語）。沖縄県の言語も、生活の中で自然に学べる言語ではなくなりつつあり、学校教育による普及が必要であると考えられる。

このような状況であるので、地域の特色に応じた課題として、沖縄県の伝統と文化に関することを沖縄県における総合的な学習の時間の中で取り上げていく必要性があると考えられる。

1. 2. 2 沖縄県を扱う総合的な学習の時間

総合的な学習の時間の中で沖縄県を扱っている実践が報告されている（吉松 2003、梅原 2006、鈴木 2017等）。鈴木（2017）によると、和光小学校は、沖縄「独自の文化、歴史、自然、地理などを学びつつ、沖縄戦・米軍基地の問題から平和学習につながる壮大な『総合学習』を構成」している。そして、米兵による婦女暴行事件や教科書検定問題、普天間基地移設問題などの時事的な問題も取り上げてきている。

沖縄県外においても、沖縄県に関することを総合的な学習の中で扱うことは、日本国内における異文化にふれることにつながり、多文化共生へとつながると考えられる。

1. 3 本研究の目的

本研究は、沖縄県でこれまで実施されてきた総合的な学習の時間の内容を明らかにすることをその目的とする。実態を明らかにすることで、今後の総合的な学習の時間にどのような内容を取り上げ、どのように実施していくのかを考えていく示唆を得られると考えるからである。

2. 方法

18歳から20歳の専門学校に通う学生66人を対象にアンケート調査を行った。学生は、平成18年（2006年）から平成24年（2012年）の間に小学校3年生から6年生として、小学校で総合的な学習の時間を経験している。沖縄県でこれまで実施されてきた総合的な学習の内容について検討するために、沖縄県外の小学校へと通った2人を分析から除外した。

3. 倫理的配慮

調査は、学生の同意を得て、筆者の授業時間の中で行った。学生にはアンケートへの答えの有無は評価には関係しないことを口頭で説明し、さらにアンケート用紙の中でも、評価には影響しないことを明記した。なお、調査の実施に関しては、事前に小田原短期大学の倫理委員会での審査を受け、許可を得た。

4. 結果と考察

4. 1 総合的な学習の時間で、学習した内容

学生に、小学校の総合的な学習の時間の中で、最も記憶に残っている内容を具体的に記述するように依頼した。その結果をTable 1 に示す。

Table 1 総合的な学習の時間の中で、記憶に残っている内容別言及人数

記憶に残っている内容	人数
戦争（戦争体験者の話を聞いた、ガマ、平和祈念公園へ行った等）	19人
無回答、覚えていない、忘れた	17人
まち探検とインタビュー、マップづくり等	8人
首里城	3人
平和の礎と伝統芸能、戦争と伝統行事	2人
歴史の劇（沖縄、宮古）	2人
ゴミ置き場のカラスを撃退する取り組みでかかし作り	1人
エイサー	1人
博物館に行った	1人
方言を調べて壁新聞	1人
サンゴについて調べた	1人
昔遊びを地域のお年寄りを招いて行った	1人
職場体験、修学旅行新聞	1人
親の仕事について	1人
昔遊びと戦争	1人
三線	1人
小学校の紹介をカメラを回して行った	1人
福祉体験をやってみた	
宮古の伝統芸能	1人
1人	
計	64人

総合的な学習の時間の中で、最も記憶に残っているものは、沖縄県に関連する内容であるとするものが、戦争19人、まち探検8人、首里城3人、平和の礎と伝統芸能2人、歴史の劇、エイサー、方言、サンゴ、昔遊び、昔遊びと戦争、三線、宮古の伝統芸能各1人、合計41人（64.1%）であり、半数以上であった。この結果より、地域に応じた課題を扱うことは、ほ

とんどの学校で行っていると考えられる。

回答の中で、特に多かった戦争に関連する総合的な学習の時間について、分析する。戦争と伝統芸能や、戦争と昔遊びをあげたもの等、戦争について答えた学生は計22人（計34.3%）である。

戦争と答えた19人に対し、追加インタビューを行い、具体的な内容について質問したところ、「みんなで戦争体験者の話を聞いた」「ビデオを見た」「ガマに行った」と具体的な行動について答え、個人やグループで「課題を立て、整理・分析して、まとめ・表現する」という探求した内容についてはあまり答えがなかった。学習の成果のまとめについては、「壁新聞にまとめた。」「感想文を書いた。」「覚えていない」という回答であった。戦争の悲惨さが印象に残っているという点では成功しているが、探究的な学習とはなっていないという見方もできる。ただし、これらの回答は、学生が小学生の頃を振り返って総合的な学習の時間の中で印象的だと考えているものであり、そもそも、総合的な学習の時間として行われた学習ではなかったということも考えられる。

4. 2 総合的な学習で学びたいこと

学生に、「あなたは、総合的な学習の時間にどのようなことを学ぶことができたら良いと思いますか。具体的に書いてください。（『国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題、児童の興味・関心に基づく課題などを踏まえて設定すること。』と学習指導要領では定められています。）」と質問を行った。その結果をTable 2 に示す。

Table 2 総合的な学習で学びたい内容別言及人数

学びたいこと	人数
沖縄の伝統と文化（方言、宗教）	18人
無回答	15人
地域の人々の交流、地域の環境	6人
国際理解、世界で起こっている問題、日本との結びつき	4人
沖縄の歴史	3人
沖縄の現状	2人
社会に出た時に必要な力（語彙力、マナー）	2人
外国人観光客について（なぜ沖縄に来るのか、色々な国のことを知る）	2人
現代社会について	2人
差別をなくす、LGBTについて	2人
日本の行事の歴史	1人

学びたいこと	人 数
ネットの危険性、沖縄の歴史から戦争や伝統、日本世界の問題を学ぶ	1人
色々な県の食べ物	1人
身近な問題を発見し解決する練習	1人
多くの人の考え方を知る時間	1人
沖縄戦、福祉	1人
国の文化	1人
児童の興味・関心に基づいて	1人
計	64人

沖縄に関連する内容について言及した者が、沖縄の伝統と文化（方言、宗教）18人、地域の人々の交流、地域の環境6人、沖縄の歴史3人、沖縄の現状2人、外国人観光客について2人、沖縄の歴史から戦争や伝統、日本世界の問題を学ぶ1人、沖縄戦1人と合計33人（51%）であり、半数以上であった。

しかし、沖縄県の歴史や文化、伝統芸能、沖縄の現状について等、抽象的な記述が多く、具体的に学ぶ内容について言及するものは、少なかった。だが、「沖縄への観光客が増えている。なぜ沖縄に来るのかを調べたい。」「色々な国からの観光客が増えている。色々な国について知りたい」と具体的に身近なことから、調べたいことを考えている学生もいた。

5. 総合考察

調査の結果、(1)総合的な学習において最も記憶に残っている学習内容として、戦争について学んだ経験を挙げる者が多いこと、(2)学生は、沖縄について学びたいと考えていることが明らかになった。

地域への関心を深めるという点において、沖縄県の総合的な学習の時間は成果を上げていると言えるだろう。一方、探究的な活動を意識している学生が少なかった。「話を聞いた」「〇〇に行った」という回答も多く、一度の体験として探究へとつながっていない可能性も考えられる。今後、授業実践における工夫が必要だと考えられる。

また、学生は、沖縄の様々な歴史・文化について学びたいと考えているのに対し、沖縄戦について学ぶ割合が多く、沖縄の歴史全体にふれる機会が少ないのではないかと考えられる。沖縄戦について学ぶことは、非常に重要なことであるが、旧石器時代から沖縄が歴史を紡ぎ、豊かな文化をもっていることに関しても学ぶ機会を用意することも重要なことであると考えられる。首里城やグスクへ行くだけでなく、琉球王国成立の過程、薩摩侵攻、琉球王国の終焉も学ぶ必要があるのではないだろうか。また、沖縄戦について学ぶだけでなく、戦後の混乱や土地接收、復帰前の沖縄の状況についても学ぶ必要があるだろう（沖縄の歴史に

ついて、伊波（2003）を参照）。

沖縄の言語に関して、沖縄県では、『しまくとぅば読本』を制作しており、小学校、中学校で配布している。これらを活用することも「沖縄」についての学びへとつながると考えられる。

但し、この研究は、総合的な学習の時間で記憶に残っている学習内容を尋ねたものであり、沖縄県全体の教育の実態を調査したものではない。しかし、学習後に記憶に残っている内容を尋ねることで、学習者により影響を与えた学習内容を明らかにすることはできたと考えられる。今後、教員への調査等を行い、より実態を明らかにすることを今後の課題としたい。

さらに、今後、総合的な学習の時間における教員の役割についても検討を行う必要がある。堀田（2020）は、幼児の科学的探究を育む保育者の役割を、「幼児にとって、協同学習者、ファシリテーター、観察者、リソース、ドキュメンター、直接的な教育者などのさまざまな役割の間で常に流動的な存在であり続けることが、幼児期の深い探究過程において重要であるといえる。」としている。小学校以降の沖縄に関する総合的な学習の時間においても、教師は「協働学習者、ファシリテーター、観察者、リソース、ドキュメンター、直接的な教育者」のさまざまな役割をどのように果たしているのかについても検討することを今後の課題としたい。

引用文献

- 伊波 勝雄（2003）『世替わりにみる沖縄の歴史』 むぎ社
- 梅原 利夫（2006）「小学校6年生が沖縄学習を行う意義——和光小学校の総合学習『沖縄』に着目して」人間関係学部紀要11巻 1-18
- 「しまくとぅば読本」制作委員会（2015）『しまくとぅば読本』 合資会社 沖縄時事出版
- 鈴木 隆司（2017）「小学校におけるカリキュラム・マネジメントの実際：生活科・『総合的な学習の時間』を中心として」千葉大学教育学部研究紀要 65巻31-40
- 文部科学省（2009）『小学校学習指導要領 第4版 平成20年3月告示』 東京書籍
- 砂上 史子（2019）「遊びを通しての総合的指導」秋田喜代美監修 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター編著『保育学用語辞典』中央法規 11-12
- 谷尻 治・早崎 大輔（2019）「『総合的な学習の時間』における探究的な学習の過程：和歌山に焦点をあてて」『和歌山大学教職大学大学院紀要：学校教育実践研究』(3) 1-8
- 田村 知子（2005）「カリキュラム・マネジメントのモデル開発」『日本教育工学会論文集』29巻Supple号, 137-140
- 野口 隆子（2020）「遊びにおける『探求』プロセス」公益財団法人日本教材文化研究財団『幼児期の深い学びの検討 探求過程の分析』公益財団法人 日本教材文化研究財団 21-29
- 花島 秀樹（2019）「地域社会とのかかわりを生かした生活科・総合的な学習の時間の実践的研究」『福岡教育大学大学院研究科教職実践専攻（教職大学院）年報』(9) 87-94

- 原田 信之 編著 (2018) 『カリキュラム・マネジメントと授業の質保証—各国の事例の比較から—』 北大路書房 16-21
- 堀田 由加里 (2020) 「幼児期の探求過程を捉える諸視点の検討」 公益財団法人日本教材文化研究財団 『幼児期の深い学びの検討 探求過程の分析』 公益財団法人 日本教材文化研究財団 31-40
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』 東洋館出版社
- 吉松 正秀 (2003) 「沖縄の『魅力』『問題』から自分の生き方を考える：総合学習『沖縄』15年」 地理教育32巻 70-76